

令和を 挑戦する静岡人 創る



しゅんぷうてい・しょうた 1959年清水市(現静岡市清水区)生まれ。82年、故春風亭柳昇さんに入門し、92年に真打ちに昇進した。2000年、文化庁芸術祭大賞受賞。16年5月から人気番組「笑点」の6代目司会者を務め、今年6月には落語芸術協会会長への就任が内定している。新作落語や古典落語を演じ、舞台やドラマなどでも活躍。城跡巡りなど多彩な趣味でも知られる。

本業の落語ばかりでなく多彩な趣味人であり、役者としても活躍する。長寿番組「笑点」の6代目司会者で、6月には落語芸術協会の会長に就任することにも内定した。だが、「落語界を背負う人物」と持ち上げる周囲の声を本人は嫌う。今を楽しむ

その先に、伝統芸能と自身の可能性を見いだそうとしている。――新時代のリーダーとして、落語界をどう引っ張っていくのか。

「落語家って本来、一人一人が独立して自分の芸を磨くもの。だから、誰かが主導して引っ張るような組織では、個性が失われてしまう。それに、落語が面白いかどうかを決めるのはお客さんで、感じ方もそれぞれ。逆に言えば、僕には全ての人を楽しませることはできないし、そんな自分が落語界を背負うな

落語家

□□□□さん

「社会の息苦しさが指摘される昨今、人と人をつなぐ潤滑油として笑いは重要では。」「インターネットなどを見ると、他人の失敗を許さない不寛容な雰囲気広がっていると感じる。だからこそ、心を和ませる笑いは大事。特にたいわいのない話で笑わせる落語は、他人を傷つける要素が少ない。ただ、伝統にあぐらをかくては駄目。時代に合わせ常に進化しないと」

伝統も□□今を楽しむ

「地元を離れて暮らしていると、静岡の魅力に気がかされる。水がきれい、食べ物もおいしい。地理的にも便利。でも、残念なことがある。それは自分の町を「何も無いつまらない場所」と語る地元住民が見受けられること。その言葉をすくむには絶対に関かしてほしくない。人口流出を招いている一因も、地域の大人が投げ掛ける言葉にあるのでは」

――新時代に挑戦したいことは。

「僕はこれまで、幸せな人生を歩んできた。それに歴史を見渡せば、現代は最も豊かで恵まれた時代。今を生きていることに感謝するのなら、もっと楽しみなきや。僕のモットーは仕事も遊びも誘いを断らないこと。その姿勢でいけば、新たな楽しみが見つかるかもしれない。だから、令和の時代に挑戦したいことを、今から決める必要はない。あくまで自身体で、毎日を全力で楽しみたい」

◇ 幕を開けた令和の時代。さまざまな分野で新たな時代を切り開こうとしている静岡県民がいる。5人の挑戦者たちに聞いた。

2019年
5月3日朝刊

- ① この人は誰でしょうか。記事内の□□に漢字で書いてみましょう。
- ② 記事内の「伝統も□□ 今を楽しむ」の□□の中に言葉を入れましょう。
- ③ この人はふじのくに観光大使も務めています。故郷静岡はどのように映っているのでしょうか。

- ④ あなたが静岡について思っていることを書いてみましょう。

年 組 名前